青年の出現と世界との疎隔

――ヘーゲル『精神哲学』における世代論の展開

栗原　隆

はじめに

ヘーゲルの『精神哲学』の第一部「主観的精神」論では、「精神の現象学」や「心理学」に先立つ「人間学」の三九六節で、同じ人であろうと、年齢によって人生に対する態度や世界観が変化することを明らかにする世代論が展開されている。『ヴィルヘルム・マイスター』にあって、「さまざまな段階、さまざまな形態、さまざまな人生の時期における人間形成」[1]が描かれるようになった時代でもあった。人生の中にあって、「青年は幸福の黄昏時に人生に踏み入り、(…) 世間の厳しい現実と闘うようになり、こうしてさまざまな生活経験を経て成熟し、自分自身を見出し、世界における自分の使命を確信するようになる」[2]ことを描出する教養小説の息吹の中で、ヘーゲル自身が青春期を送った証しと言えるかもしれない。

ヘーゲルによる「精神哲学講義」(一八二七年〜二八年) の受講者による筆記である。「子ども時代は第一

段階です。青年期においては一般的に、自分の目的、自分の理想、自分の普遍性と現実とが対立します。大人においては、この対立は別の関係へと反転されます。第四段階においては、自ら廃棄した個別性へと再び立ち返ります」（GW.XXV-2,S.622f.）。四区分の世代論を展開する中でヘーゲルは感覚能力の成立について分析、そこには実験心理学でも見られるような論述も含まれている。「最初、子どもは、自分にとって事物を顕わにする光についての感覚しか持っていません。この純然たる感覚は子どもを、離れたものをも手近にあるものとして手を伸ばして掴むことへと誘います。しかし子どもは、触れ合い（Gefühl）の感覚を通して、距離について情報を得るのです」（GW.XXV-2、S.975f.）。

この論述の背景に、チェセルデンによる報告へのコミットを見てとらなければならない。そもそもは、モリヌー（William Molyneux：1656‐1698）がJ・ロックに宛てて、触覚によって立方体と球とを識別できていた先天性の盲人が、開眼手術によって視力を獲得した時に、視覚だけで立方体と球とを識別できるかと提起したことを発端として、バークリーやライプニッツ、やがてコンディヤックやディドロさらにはヘルダーらによって論じられることになった問題が発端である。この問題は、イギリスの医師、チェセルデン（William Cheselden：1688‐1752）が一七二八年の『哲学年報（Philosophical Transactions of the Royal Society of London）』四〇二号で、白内障の開眼手術を受けた者には、すべての物が眼に張り付いているように見え、距離が認識できないことを報告したことによって実証された。

チェセルデンによる報告を踏まえて世代論を展開することは、認識能力の発達を裏付けることになる。「子どもの最初の時期は、とりわけ感性的な形式に携わります。人にはこれほど多くを学ぶ時期はありません。／学ばれるものが非常に多いということは、例えば先天盲の方が見えるようになった時、距離などにつ

いていかなる表象をも持つことができません。これこそ子どもがこの時期に学ぶべき偉大な内容なのです」（Vorlesungen.XIII,52）。本稿は、ヘーゲルが『精神哲学』において世代論を展開する中で浮かび上がった、感覚能力の発達、さらには青年が直面する世界との相克という問題の淵源を明らかにすることを課題とする。

1　ヘーゲルにおけるチェセルデンによる報告の情報源

ヘーゲルがチェセルデンによる報告について情報を得ることができた典拠としてまずもって挙げられるのは、ヘルダー（Johann Gottfried von Herder：1744―1803）による『批評論叢（Kritische Wälder）』の「第四論叢」（一七六九年）での詳細な紹介である。[3] また一七九〇年にシュトゥットガルトからテュービンゲンに教授として招聘されたアーベル（Jakob Friedrich Abel：1751-1829）の『人間の表象の源泉（Ueber die Quellen der menschlichen Vorstellungen）』（一七八六年）でも、チェセルデンによる報告への参照を見て取ることができる。「生まれつき目の見えない人は、すべてが自分の上にあるように思っていた。子どもたちも、離れたものすべてが小さいものだとみなしている。それゆえ距離を認識できない」（S.178）。さらにテュービンゲン神学校在学時の一七九〇年の冬学期に、フラット（Johann Friedrich Flatt：1759-1821）によって講じられた「心理学」講義から、ヘーゲル自身、直接知っていたことも考えられる。「自分の視力を早くに失った人が、後年、再び視力を回復したことがありました。その後ある時、その人が屋根の塔の上に座って、彼の腕を何かに向かって伸ばしていたところを人に見られました。見つけた人はその人に尋ねたそうです、何に向かって?と。その人は、月を掴もうとしていますと言ったそうです。その人には、手で月を掴むことがで

きると思える程に、近くにあるように思われたわけです。視力を取り戻した目の見えない人々の例は、同じことを明らかにしています[4]」。

チェセルデンによる報告に関しては、シュルツェ（Gottlob Ernst Schulze：1761‐1833）の匿名著書『エーネジデムス（Aenesidemus）』（一七九二年）が詳しい。「新生児の最初の表象が、その子に、彼の表象の外部の何らかのものの実在的な現存在を指示しているなんてことは、疑ってかかってもいい。（…）後年になって盲目から救済された人々にあって、視覚の最初の性質や次第に変化してゆくことについて、私たちが持っている情報（とりわけ一七二九年のチェセルデンが視覚を回復させた先天盲の人の事例――この話は、ヴォルテールの『ニュートン哲学の要素』第六章に記録されている[5]――）はこのことを明らかに認識させる。それゆえ根源的には、私たちの表象は、私たちの外部そして私たちの表象の外部のものと関連するものではなく、むしろもっぱら、私たちの内にあって、私たちに即した純然たる主観的なものだと見做されよう」（Aenesidemus,230f.）。

チェセルデンによる報告から、視覚による認識は、予め認識されていたからこそ成立することを読み解いたシュルツェは、意識内在主義の観念論の構造を描出する。「なるほど我々は、我々が家を見ているその場所に即して、人が、樹木が、あるいはそうでなければ何か別のものが立っているということも考えられる。しかしながら我々は、端的にこの場所に家しか見ることができない。さらに我々は、家を感覚している間、家に属している諸部分を結びつけて、感覚が別のものに変わってしまうことなく、一つであるようにしておかなければならない。それならなるほど我々は、家の屋根が下にあって、その土台が上にあることを考えることもできる。家の右側にあるものが、左側にあると考えることもできるかもしれない。しかし我々はこう

したことを感覚できるのではなく、我々が見ている家の諸部分を一つであるように、感覚している間、結びつけておかなければならない」（Aenesidemus,232）。樹木や犬小屋それに柵、あるいは屋根や窓が見えるにしても、私たちが家だと認識できるのは、それを家だと把握しているからだという形で、シュルツェは観念論の構造を基礎づけた。シュルツェを「懐疑論論文」（一八〇二年）で徹底的に批判したヘーゲルならば、この論述については、知悉していたはずである。

しかし『精神哲学』の三九六節に対応する『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』（一八一七年）の三一七節では、「個人の完全なあり方が大人であることである限り、個人が特殊化していくことが、年齢の自然な経緯である」（GW.XIII,187）と、たった二行の論述でしかない。ベルリンでの「精神哲学講義」については、一八二二年夏学期（GW.XXV-1）、一八二五年夏学期（GW.XXV-1）、一八二七年～二八年冬学期（GW.XXV-2：Vorlesungen.XIII）の三回、四種類の筆記録が刊行されているが、チェセルデンによる報告をめぐる論述は、それぞれに違う。その他に、一八二二年頃に執筆された草稿「〈主観的精神の哲学〉のための断章」（GW.XV.S.207-249）には、チェセルデンによる報告についてのコミットメントや距離の認知についての論述は含まれていない。

一八二二年の「精神哲学講義」での論述は、的外れの感を拭いきれない。「私たちは距離を、感官を通して持つのではありません。距離は視覚の感覚のうちにはないからです。むしろ私たちは距離を、推論することによって、さまざまな現象を比較することによって学ぶのです。子どもは望みうる限りのものすべてを掴もうとします。治療を経た後に、どんなものでも、自分から同じだけ離れているように見えた先天盲の話しにおいて、同じことが分かるでしょう」（GW.XXV-1,S.54）。推論によって距離を測るという発想は、チェセ

ルデンによる報告から逸脱しているようでもある。

一八二五年の「精神哲学講義」で距離の表象は、新生児における認識の獲得の問題を踏まえつつ、次のように語られている。「手術を受けて、視覚の明澄な感覚に到った先天盲の方は、あらゆるものがまったく近いところにあると思われました。彼には距離の表象がなかったのです。距離の表象が測られるのは、気付きによって、他のものに対する対象の大きさによってです。彼は長い時間をかけて、距離を判断するために、それを測らなければなりませんでした。見ることにとっては、対象は他のものと同じように近く、比較・照合することによって初めて私たちはこの区別について知るわけです。その際に特別なのが、視覚に比肩されるべき触覚（Gefühl）の表象です。子どもはそうして見ることを学ばなければなりません。ごちゃ混ぜになっているものを区別しなければならないのです。ないもの、蔭になっているもの、隣り合っているものなどを」（GW.XXV-1,S.250）。新生児における距離感覚の成り立ちを、開眼手術後の先天盲の方の見えを援用したうえで、距離を認識するには、触覚はもとより、他のものとの比較・照合することが必要だと論じられた。

2　シュルツェの『心理的人間学』

シュルツェに『心理的人間学（Psychische Anthropologie）』という三版を重ねた著書があり、チェセルデンによる報告について論及されている。ただ、それぞれの版で内容はまったく違う。初版（一八一六年）では、「物体を描いた単なる絵画から実際の事物が区別されないように、そもそも視覚によって物体の形態は認識されないということを、目が見えるようになった盲目の人に即して、チェセルデンによって行なわれた

観察が明らかにしている」（PA（1816）S.80）ことを伝えてはいるものの、次のようにも述べられている。「最初は、（子どもにあっては簡単に観察されるように）空気を振動させる物体が何処にあるかというその場所も、その物体が近いのか距離があるのかということも、聴覚によって認識されることはなく、こうした認識に人間が達するのは、次第しだいに、鳴っている物体の場所や近さを、音の一定の性質から判断する技術を習得することによってである」（PA（1816）S.77）。距離の感覚は、次第に音の性質から判断することができるようになるとされている。参考文献として挙げられたヴェッツェル（Johann Karl Wezel：1747〜1819）という啓蒙主義者（Vgl.PA（1816）S.556）の著『人間学的心理学の本来の体系の綱要（Grundriss eines eigentlichen Systems der anthropologischen Psychologie）』（一八〇四年）では、距離を推論するという機序が語られていた（Vgl. Grundriss.S.425）。

『心理的人間学』の二版（一八一九年）では、次のように語られた。「チェセルデンの手術を受けた、白内障で盲目になっていた少年の最初の視覚について、『哲学会報（Philosophical Transactions）』（一七二八年、四〇二号）で行なわれていた観察によれば、見られた対象は最初、眼からの距離を取ったかたちでは現前していなかった。むしろ、触られた物体、すなわち触られた道具であるかのように、距離は、触れられて知覚されるようであった」（PA（1819）S.105）。参考文献として挙げられている、キャンベル（John Campbell）の「見ることについて（On Vision）」（一八一七年）では、「目の見えない人は自らの肘を、以前に得ていた自分の腕と手の間の距離の認識を応用することによって、〔両手の間にある物体の大きさの〕表象を調達する[6]」と述べられていた。

『心理的人間学』の三版（一八二六年）では、チェセルデンによる観察が的確に紹介されている。「私た

ちの外部にある事物を見る際には、経験とは相反するかもしれないが、触覚（Betastung）の手助けによる教えが必要になり、見ることを是正すると想定してもいい。チェセルデンの少年が、視力を獲得した時に見えたのは、眼の中にではなく眼の外部にある諸事物が、何の距離もないということであった。そこで彼にはそれらの事物が眼にほとんど触れているように思われたのである。さらに三〜四週間の多くの新生児にあっては、その触覚は外的な諸事物を認識する際にはほとんど働いていないわけである」（PA（1826）100f.）。このシュルツェによる論述はもとより、論及されているフォン・ベーア（Karl Ernst von Baer：1792〜1876）の著書『人間学についての講義（Vorlesungen über Anthropologie.）』（Erster Theil：一八二四年）も、ヘーゲルが読んでいたなら、裨益すること大であっただろうと思われる。

「子どもは次第しだいに、自らの触覚器官を用いることを学んで、漸く次第に、匂いや光、音の印象に気づくのである。新生児にとって世界は、暗い夜、死んだ静けさであるが、そうしたやり方で、自らの感官を開発して、自らの意識の途上に立つのである。／感官は全生涯を通して私たちの教師であり続ける。感官感覚がなかったなら、人間はいったい何であろうか？　実際この問いには、応えるのが難しいように思える。すんでのところで自己意識だけは残されるであろう。この自己意識でさえ、私たちの自我に属していない何らかのものを表象することがなかったなら、ほとんど展開されることはなかったであろう」（von Baer：Vorlesungen über Anthropologie. Erster Theil, S.326f.）。ベーアには動物の卵子を発見して、『動物の発達史（Über Entwickelungsgeschichte der Thiere.）』（第一部、一八二八年）において前成説を完全に否定し去った業績もある。

「我々は決然として、シュルツェの心理的人間学と共に、あるいはホフバウアーの注記に従って人間精神

の自然論を語ろう」（Handbuch der psychischen Anthropologie.I,S.5）と、『心理的人間学』の初版を踏まえることを宣していたのは、フリース（Jakob Friedrich Fries：1773〜1843）の『心理的人間学の手引き（Handbuch der psychischen Anthropologie）』（第一巻、一八二〇年）である。この書でも距離と触覚の問題が展開されていて、「位置や距離、形についての我々の表象はすべて、触れる際にも見る際にも、推論によって作られている」（Handbuch.I,S.124）とする学説が紹介されていた。となると、ヘーゲルの一八二二年の「精神哲学講義」における「私たちは距離を、推論することによって、さまざまな現象を比較することによって学ぶのです」（GW.XXV-1,S.54）という論述については、『心理的人間学』（初版）や、そこで論及されたヴェッツェル、さらにはフリースの一八二〇年の著書と通じ合う発想が示されていたとも言える。

3　触覚の根源性

赤ちゃんに特有な、手足をバタつかせる動作についてヘーゲルは次のように述べている。「〔光という〕この純然たる感覚は子どもを、離れたものをも手近にあるものとして手を伸ばして掴むことへと誘います」（GW.XXV-2,S.976）。赤ちゃんには距離感覚がないことを明かすこの論述の典拠として考えられるのは、ライプツィヒ大学教授のカールス（Friedrich August Carus：1770〜1807）の『心理学（Psychologie）』（第一巻：一八〇八年、第二巻：一八〇八年）である。「子どもは何かの方を、それからこのものそれ自体を見たなら、伸ばした手の向かう何か特定のものを掴むことをも始める」（Psychologie.II,S.47）。カールスは感覚の分化を次のように描出している。「触覚と嗅覚は、次第に種的に違う感覚へと分化する。それらに続くのが味覚で

あって、嗅覚なしに満足されることはない。その上で（およそ生後五週で）聴覚の感覚が展開される。この聴覚が初めて、曖昧な音を子どもに理解させる。（…）結局（およそ、五週ないしは六週で）見ることが最も繊細な感覚として現れる。（…）ようやく子どもは、何かの背後に何かを、それから何かの上に何かを、そして結局は何かそのものを見るのである」（Psychologie.II,S.46f.）。

視覚による認識は、赤ちゃんにさまざまな感覚が発現した後になって生じるという、触覚の根源性をカールスが語る根拠には、チェセルデンによる報告があった。「先天盲において触覚（Tastsinn）は、いわば触覚の領域へ視覚を取り入れ、視覚の代用となる」（Psychologie.I,S.139）。感覚の発達と成長とを輻輳して捉える視点は、カールスが自らの著書で、参照をしばしば指示していた（Psychologie.I,4,98,139,140,II,30,32,394）シュヴァルツ（Friedrich Heinrich Christian Schwarz：1766-1837）による『教育論（Erziehungslehre.）』（第一巻：一八〇二年、第二巻：一八〇四年）にも共通していた。

シュヴァルツは『教育論』（第二巻）で、生後五週目の終わり頃の赤ちゃんからは、叩いたり引っ掻いたりするかのような動作が消えることを挙げて、距離を些かなりとも認識できることを明らかにしながら、次のように論じる。「チェセルデンを含めて、あらゆる対象は目の上に貼り付いて現象するので、視覚だけでは距離について何も教えないという所見、触覚（Gefühl）の助けがなくてはならないという所見は正しい」（Erziehungslehre.II,373）。この『教育論』は、「子ども、もしくは子どもの誕生から四歳までの発達と教養形成」という副題が示すように、とりわけ一六〇頁以降で子どもの発達行程を詳細に明らかにしている。シュヴァルツはヘーゲルとハイデルベルク大学の同僚で、親交を温めていたことが、一八一七年七月八日についての、フォス、あるいは七月一八日についてのジャン・パウルの証言から確認できる（Vgl.Hegel in Berichten

seiner Zeitgenossen.S.147 u.220)。

シュヴァルツの教育論の主旨は、次のようにまとめられよう。「全き人間は、全面性と自由に向けた真なる教育において教養形成されてこそ、出来るなら、自らの内に完全な美における自らの神的な原像を据えることができる」(Erziehungslehre.II,157)。「ここでは自然が私たちを導くに違いない。(…) しかも、子どもの中に備わっている一般的な自然ではなく、より高次の自然が私たちを導くに違いない。(…) ルソーの学説においては、すべてがたいがい一般的な自然に依存している」(Erziehungslehre.II,158)。「古代ギリシアの精神による教養形成が、人間に美を直観することを教える。キリスト教の精神による教養形成は深い意味での愛に目覚めさせる。(…) 両者の結合こそが幸い多き接合であって、真の教育に到る正しき道に出会うことができる。双方が貫徹されてこそ、精神はこの世界のためにも、天上のためにも、形成されるからである」(Erziehungslehre.II,159)。

パイデイアを想起させるシュヴァルツの理念は、『精神の現象学』と通じ合う。事実、『教育論(第一巻)』には、「現象する精神」という語句さえ見られる。「身体と精神とは相互に交互に、互いのために形成される。(…) 初めから、あらゆる素材とその形成は、胚(Embryo)のなかにあって、精神の仕事にして財産である――現象する精神そのものである」(Erziehungslehre.I,159)。精神の生成と子どもの成長とが輻輳して捉えられている。「『いかにして精神が現象するのか?』子どもが生成する。『いかにして精神が生み出されるのか?』子どもが生成するのである」(Erziehungslehre.I,159)。シュヴァルツは、子どもの教育にあたってお話しの才能が求められる教師にとっても、世界全体への知見が求められる子どもの読書にとっても役に立つ書物として、カンペ(Joachim Heinrich Campe:1746-1818)の『新ロビンソン(Robinson der Jüngere)』(一七七九年)

を挙げている（Vgl.Erziehungslehre.I,373）。実にこの書は、ニュルンベルクのギムナジウムでヘーゲルが、主人と奴の議論の範型として挙げた書でもあった[7]。

シュヴァルツは、それぞれの年齢期の特徴を描くことを通して、「世界」を問題として立てる。「子どもの発達にとって、確かに好都合であるように思われるのは、青春期（Frühling）とともに世界へと立ち現われることである」（Erziehungslehre.II,31）。「触れ合い（Gefühl）は、活動的であるあらゆる感官のなかでも第一のものである。子どもは自らの活動のなかで既に、第一の感官を世界へともたらす。なぜなら精神は、世界と最も親密に関与するよう、触れ合いの感官を通して規定されているからである」（Erziehungslehre.I,176）。人間の成長過程が分析されることを通して、感覚から精神へと、人間の能力が高まる発展過程が明らかにされるとともに、世界の出現が問題として浮上する。「それゆえ人間の発達は私たちにとって、未分明の状態からの脱出として現象する。そこで次第しだいにますます抜け出して、形作られてゆく。精神の有限性は、精神が外的世界を知覚する中で展開されるということをもたらすので、外的な世界は人間にとって、次第にカオスから抜け出て、世界のもっとも完全な状態と、人間の自己意識へともたらすに違いない。ここでこそ人間は自らの自由を見出す」（Erziehungslehre.II,120f.）。シュヴァルツは、示唆的な言辞を書き残している。「子どもの誕生や発達が、世界の創造と擬えられるのは至極当然である」（Erziehungslehre.II,121）。そして「人間は世界において自らを見出す」（Erziehungslehre.II,379）とも、「子どもは自分自身を世界のうちに見出した」（Erziehungslehre.II,435）ともされたのである。

4　世界の出現と精神の展開

「シュルツェが語っていることは正鵠を射ている。『そもそも人間は本性上、非常に早くから自らの情熱と歓びの源泉として学び知っている自分の外部の世界と同様、自分の内なる世界にも携わることに非常に傾いている』」（Handbuch.I,S.10）。これは、フリースの『心理的人間学の手引き』（第一巻、一八二〇年）に見られる章句である。フリースが踏まえているのは、シュルツェの『心理的人間学』（初版）の七頁である。フリースはカールスにも論及する。「内的経験そのものに関しては、最近その難点が私たちの学問において厳密に検討され、とりわけカールスによって詳細に論じられている」（Handbuch.I,S.10）。

もとよりカールスは、『心理学』の「年代別の心のありようの特徴づけ」（Psychologie II,27-91）で、「子ども時代（Kindheit）」（41-61）、「若者（Jugend）」（62-75）、「大人世代（Mannes-Alter）」（75-79）、「老齢世代（Greises-Alter）」（79-91）という四段階を区分していた。踏まえられていたのはシュヴァルツである。これに対しフリースは、人間の発達行程についての議論を斥ける。「ここ〔年代と教養教育との並行論〕で規定された発達の自然的な諸段階は教育にとって非常に重要になるかもしれないが、しかし、教育について、誤った考察に従うことに注意しよう。なぜなら、個々の人間の誰にも、精神的な発達の自然的な段階行程など、厳密に考察され得ないからである」（Handbuch.II,S.174）。精神が展開する理想を想定することを、フリースは拒む。「私たちにとって重要なのは、人間がそうした理想を際立たせることなどできないということを、学問的にはっきりさせることである」（Handbuch.II,S.163）。人間精神の発達の理想を掲げたりするのは、「知ったかぶりの形而上学者」（ibid.）だからだという。

カールスによる青春期の分析に、興味深い論述がある。「多くの理念が互いにますます広範に結びつくことによって、青年（Jüngling）は理想的なものへと高まって行く。青年は長らく多くの人間のうちにこうした理想を求めている。こうした試みは彼にとって失敗に終わっていたので、今や、彼の感官に直面しているより高次の超越的な世界において求めるようになる。そこで現れるのは、創作や想像に耽る時期であり、革命に際しては青年が常に主要な役割を果たすように、体制に対する不満である」（Psychologie.II,S.66f.）。若者が世界に対する違和感に苛まれる心境についての同様な記述は、シュヴァルツの『教育論』（第三巻・一八〇八年）にも見られる。若者は、「子ども時代のパラダイス（Paradieß）へと懐かしく振り返る」（Erziehungslehre.III,S.45）とともに、「世界を改良しよう（verbessern）とする決意」（Erziehungslehre.III,S.45）を抱くという。精神が世界を捉えることができるまでに、世界が精神を育んできたにもかかわらず、若者の精神はその世界との疎外に苛まれるというわけである。

一八二七年冬学期のヘーゲルの「精神哲学講義」では、次のように青年期が分析されている。「青年（Jüngling）は、理想である真にして本質的なもののための衝動を、目的を持っています。若者（Jugend）は理想の時代です。それゆえ、内面的で理想的な世界と、理想に常に適合しない外的で現実的な世界との関係が生じます。そこで青年は自らが現存在するなかで、自らの理想において求める満足を得ることはありません。ですから青年は、自らの普遍的な表象、諸原理、理想をもって、現実の世界に反することになるのです」（GW.XXV-2,S.627）。凡俗に生きる大人への「移行は、青年にとって痛々しいものになり得ることがしばしばです」（GW.XXV-2,S.627）。特殊な仕事に終始させる現実の世界においては、自己犠牲をも厭わないような「若者の熱狂は、消え去るのです！　この移行はとりわけ、一種のヒポコンデリーの形で現れます」（GW.

XXV-2,S.628)。精神を自立するまでに育むのは世界であるにもかかわらず、自立せんとする精神にとって世界は軛としても現れる。感覚から精神へという発達行程に即して、世界との関係を考慮することによって、「子ども時代」「青年期」「大人時代」「高齢期」という四区分がなされたのである。

ペトリの『ヘーゲルの主観的精神の哲学』では[8]、ナッセ（Christian Friedrich Nasse：1778〜1851）の編集した『人間学雑誌（Zeitschrift für die Anthropologie）』（一八二三年〜二六年）に見られる年齢期の四区分がヘーゲルに影響したことが示唆されている。『人間学雑誌』（一八二四年第一分冊）には確かに次のような論述がある。「人間の理想や人類の理想でさえ、精神的な面からいえば、賢さへの最高の接近であって、その接近を通して人間は、認識に満ちて、精神に溢れて、自己規定的に世界と対立して、自ら全体を見通す」（Zeitschrift für die Anthropologie.1824,I,S.106）。さらに、『人間学雑誌』（一八二六年第一分冊）では、「主たる特徴から見た人間の四つの年齢期」（Zeitschrift für die Anthropologie.1826,I,S.63）として、「子ども時代（Kindheit）」（65-68）、「青春時代（Jünglingsalter）」（68-71）、「大人時代（Das männlichen Alter）」（71-73）、「高齢期（Greisenalter）」（73-77）が解説されていた。

しかしながら、ヘーゲルにおける年齢期の四区分には、既にカールスやシュヴァルツが先駆していた以上、ナッセの『人間学雑誌』に触発されたものだとは言えない。とはいえ、一八二二年夏学期の「精神哲学講義」では、「1・若い時代（die Jugend）」の「a・子ども（das Kind）」「b・少年（der Knabe）」「c・青年（Jüngling）」、「2・大人時代（das Mannes-alter）」、「3・高齢時代（das Greisesalter）」という三段階もしくは五つの細区分がなされていた。青春期の特徴づけは、ほぼ完全に提示されてはいた。「青春時代（Jüngling）は対立の時代であり、対立を解消する時代です。一面では、教養形成の完遂を通して、他面では、この解消

は表象や思索において現前しています。ですから青春時代は理想の時代なのです。対象となっているのは、普遍的な対立、すなわち世界です。世界は理想へと高められます。その結果、若者は、自らを形成しようとする目的と、世界を理想に合致させようとする目的と、二重の目的を持ちます。そこで若者は、大人よりも非利己的なものとして現れます。教養形成の目的とは、自分の理想を実現しようとすることであり、世界を改良しよう（verbeßern）とすることです」（GW.XXV-1,S.49）。

一八二五年夏学期の「精神哲学講義」でも、「若い時代（die Jugend）」を「子ども（Kind）」「少年（Knabe）」「青年（Jüngling）」（GW.XXV-1,S.249）へと三つに細区分した上で、「大人」そして「高齢者」へと議論が進められている。「子どもはまだパラダイスにいます。ですがこれは失われなくてはなりません」（GW.XXV-1,S.251）。「これに対して青年（Jüngling）は、独自の規定を持っています。内容に満ちた具体的な主体、個人となるのです。さて人間が自分の内から規定を措定する限り、世界との和睦は破られてしまいます」（GW.XXV-1,S.254）。自らが掲げる理想の世界と現実の世界との乖離に直面して「若者（Jugend）の行動力は、より普遍的なやり方として世界の現実を改良しようとする（bessern）理想を実現させることに向かわせます」（GW.XXV-1,S.254）。「この当為が実現されるという成熟が、大人時代（Mannesalter）へ移行させます」（GW.XXV-1,S.254）。とはいえ「こうした移行は人間の不安をかきたてます。一定の悲哀、ヒポコンデリーはたいていの人間に生じるものです」（GW.XXV-1,S.255）。青年と世界とが対立する構図はそのまま、年齢期の区分は、三段階もしくは細区分を含めると五区分である。一八二二年頃から執筆された「〈主観的精神の哲学〉のための断章」でも、「子ども時代（*Kindesalter*）、大人時代（*Mannesalter*）、高齢者（*Greisenalter*）」（GW.XV.S.230）に三区分されるとともに、「子ども時代」がさらに「子ども（Kind）」「少年（Knabe）」「青年

(Jüngling)」(GW.XV.S.231) へと細区分されている。

従って、ヘーゲルが、一八二七年になって、年齢期を四区分することへと転じたのも事実ではある。とはいえ、世界と調和しているパラダイスにある子ども時代と、世界との乖離に苦しむ青年時代とを、「若い時代」として一括りにすることに無理があるのは言うまでもない。「青年期」を「子ども時代」から独立させることによってこそ、世界との調和から世界との対立へ、そして「世界を維持して生み出しながら、さらにおし進める」(GW.XXV-2、S.980) 大人、さらには思い出の中に生きることになる「高齢期」という各年齢期が際立たされることになる。それによって取りも直さず、精神の展開と世界との関係が弁証法的に描出されることになったと言えよう。

結　語

一七九四年一二月二四日、ヘーゲルはシェリングに、書簡を送っている。その掉尾で、「もう一つお願い。『南ドイツ新聞』の、マウヒャルトの『便覧 (Repertorium)』が批評されている紙面を、ジュースキントから送ってもらうことはできないだろうか？　当地では、どうやったら見つけ出せるものか分からない」(Br.I, 13) と書き加えていた。「便覧」とは、マウヒャルト (Immanuel David Mauchart：1764-1826) の『経験的心理学のための一般的便覧 (Allgemeine Repertorium für empirische Psychologie)』を意味している。ヘーゲルは何を気にしていたのであろうか。

同年、ベルンでヘーゲルは、同地で家庭教師生活を送っていた同級生のメークリンク (Friedrich Heinrich

Mögling: 1771-1821）から、一七九〇年冬学期にフラットが講じた「心理学」講義を筆写したノートを借りて、「心理学と超越論哲学のための草稿」（GW.I,167-192）を執筆、その冒頭は『一般文芸新聞』の八六号（一七九二年四月二日）に掲載されたシュミット（Carl Christian Erhard Schmid：1761-1812）の『経験的心理学（Empirische Psychologie）』（一七九一年）への書評の引用から始まっている。『経験的心理学のための一般的便覧』（第一巻、一七九二年）でも、この『経験的心理学』が書評されていた。そして『経験的心理学のための一般的便覧』（第三巻、一七九三年）に収載された、「芸術的な著作において性格を正しく描出するために必要な予備知識」という論考の「年齢期の影響」（S.236-239）という一節では、「子ども」「若者」「大人」「高齢者」という四区分が展開されていたのである。「若者が生きている圏域は、不釣り合いなほどに拡張して、家族という小さな社会だけでなく、世界（Welt）さえもが、性急な若者にとってはあまりに狭くなる」（S.237）。従って年齢期の四区分は、青年時代からヘーゲルの知るところであったと言える。

それだけでない。アーベルの『人間の生に基づく注目すべき現象の集成と説明（Sammlung und Erklärung merkwürdiger Erscheinungen aus demmenschlichen Leben.）』（第一巻、一七八四年）に、「幼少期の魅惑的な刺激について」という論考が収められている。「少年少女にあってはその構成要素、とりわけ彼らの趣きと極めて貴重な瑞々しさはますます初々しい。若者にあっては、もっと精神的で、熱情的で、およそ活動的で気高い。絶えず干乾びてゆく大人と高齢者とは、あらゆる素材の極めて高貴なものを次第に捨ててゆく」（S.59）。人生における年齢期による人間性の違いは、学生時代からヘーゲルの関心であり、熟知するところであったとさえ考えられる。赤ちゃんから大人へと、成長を経ることを通して感覚的認識から精神へと発達するという「世代論」が導入されることによって、「世界」という論点が浮上する。感覚的な認識を学ぶ子

ども時代から青年期に到って、精神的な認識が生まれることに伴って、自然的世界だけでなく、精神的な世界が問題となる。世界は子どもには自らがその中に生き、調和していたにもかかわらず、青年にとっては敵対的なものともなる。それにもかかわらず、青年はやがて大人となって、その世界を統べるようにもなる。こうした世界と精神との関係の認識は、ヘーゲルに、改めて、哲学の役割を想起させることにもなったに違いない。

一八〇一年冬学期のイェーナ大学での「論理学・形而上学講義」でヘーゲルは、「哲学が人間に、その内面的な世界を開示する」（GW.V,269）と語っていた。これにより、内面的世界と外面的世界との分離がもたらされはする。しかし、ヘーゲルは哲学にその宥和を求めていた。「世界はただ、哲学者の精神のうちでのみ、調和的です」（ibid.）。これは取りも直さず、人間の自然性と、これを克服した精神との調和に他ならない。とはいえ「イェーナ精神哲学草稿」（一八〇三〜〇四年）では、「この精神は自然のうちでは、精神として実在するのではなく埋没して隠されたものとしてあり、己れ自身の他者としてあるにすぎない」（GW.VI, 275）とされる。ただ。両親による子育てによって、「世界はこれまでのように外的なものとして絶対的な形式をとって子どもに立ち現われるのではなく、意識の形式を通して貫徹されるようにして現われる」（GW. VI,304f.：最初稿）という。世界は、外から与えられるのではなく、人間本性の中から精神の芽生えとともに現出してくることにより、精神は自らの本性を捉え返すことになる。精神は世界を把握することを通して、自己認識に到るというわけである。

もとより、精神は、自然だけでなく、世界によっても育まれてきたことに青年期になって気づくことになる。とはいえ、その世界は青年にとっては桎梏のようにも思えてしまう。すなわち、年齢期の区分の問題に

際して浮かび上がってきたのは、世界の発見と世界との葛藤に煩悶する青年の出現という問題であった。世界と対峙し、世界を改革しようとする熱情に燃える青年の出現とは、ゲーテやシラーによって、文学作品において形象化された後に、カールスやシュヴァルツによって、哲学的な問題へと昇華されたと見ていい。そしてヘーゲルは、『エンツュクロペディー』という自然から精神の自己知へと人間本性が高まる道程の最中にあって、青春期に到って、精神が自然からも世界からも自立しようと思いたちはするものの、大人になるにつれて、世界を担うことを自ら引き受けることを描出したのであった。

振り返れば、『精神の現象学』においてヘーゲルは、「世の成り行き（Weltlauf）」に先立ち、「心胸の法則と自負の錯乱」の論述を通して、世間の秩序を破壊して、これに代えて心胸の法則を実現しようとするものの、世の抵抗にあって挫折せざるを得ない人物の定めを明らかにしていた。さらに遡れば、「キリスト教の精神とその運命」と題された草稿群がある。『ヨハネによる福音書』での「ぶどうの樹」の比喩を、「生命の樹（Lebens-baum）」（GW.II,S.255）として解釈する箇所でヘーゲルは、次のように書きつけていた。「コスモスは人間関係そして人間生活の全体である。（…）世界は全体であって、世界のさまざまな関係やさまざまな規定は、（…）自己展開する人間の仕事である」（GW.II,S.256）。

しかしイエス自身は、この世では受け入れられなかった。「人間の世界は彼自身のものであり、彼にとって最も身近なものである。ただ人々は彼を受け入れずに、彼をフレムトなものとして扱うのである」（GW.II,S.256）。これはイエスの運命というより、ヘーゲル自身の境涯を反映した叙述だったのかもしれない。こうして、カール・モールやヴェルテル、さらにはイエスなどに青年の形象化を見たヘーゲルは、子どもを育んできた世界が、「人間関係そして人間生活の全体」であるにもかかわらず、青年期になって疎遠なものと

して立ち現われることを、「世代論」において論じることを通して、感覚から精神が立ち現われて自己知に到る一契機として解明するようになったのである。

》引用略号《

本文中で、引用直前に出典を明示している書籍の書誌情報については、再掲を省略した。

Br……Briefe von und an Hegel.Bd.I (Felix Meiner)
Erziehungslehre ……Friedrich Heinrich Christian Schwarz：Erziehungslehre. Bd.I(1802), Bd.II (1804)
GW ……G.W.F.Hegel：Gesammelte Werke (Felix Meiner)
Handbuch……Jakob Friedrich Fries：Handbuch der psychischen Anthropologie. (1820)
PA ……Gottlob Ernst Schulze：Psychische Anthropologie. Göttingen. (1816)：Zwite Ausgabe(1819)：Dritte Ausgabe (1826)
Psychologie ……Friedrich August Carus：Psychologie. Bd.I (1808), Bd.II(1808)
Vorlesungen……G.W.F.Hegel：Vorlesungen. Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte. (Felix Meiner)

》註《

（1） Wilhelm Dilthey：*Leben Schleiermachers.* Erster Band.Berlin.(1870) S.282
（2） Wilhelm Dilthey：*Das Erlebnis und die Dichtung.* Achte Auflage. Leibzig und Berlin (Verlag B.G.Teubner) (1922) S. 393f.
（3） Vgl.Johann Gottfried von Herder：*Herders Sämmtliche Werke.* hrsg.v. Bernhard Suphan, Vierter Band, Berlin (1878) S.50.「最もはっきりと分かるのは、チェセルデンによる先天盲からの回復に即して、平面と物体とが、像と形とが分かれたままであるように、視覚と触覚とは、分かれたままである。（…）彼にとって眼は開かれた。彼には空

間がまったく見えない。彼にとってはあらゆる対象が眼のなかにあるのだ。彼は、どんな対象をも、さまざまな形から識別できない。かつて触覚によって認識できていたものをも、視覚によって認識することができないのである」。

（4）J.F.Flatt:*Philosophische Vorlesungen.* 1790.（Frommann）2018. S.145f. ここでフラットは、マインツ大学のドルシュ（Anton Joseph Dorsch：1758 - 1819）の『外的感覚の理論（Theorie der äusern Simlichkeit）』（一七八九年）に依拠していたと考えられる。同書のの三一頁で、アブラハム・タッカー（Abraham Tucker:1705 - 1774）の著書『自然の光（Light of Nature persued by Edward Search）』（一七六八年）に基づいて、表現こそやや違うものの、同じような事例が紹介されている。

（5）コンディヤックによる、ヴォルテール『ニュートン哲学要綱』第二部第七章の再録を掲げる。ただし、一七二九年とあるのは誤記である。

「一七二九年、最も卓越した知性と手先の器用さを合わせもった高名な外科医の一人、チェセルデン氏は、いわゆる白内障――氏はこれを誕生とほとんど同時に患者の目の中に生じる障害ではないかとにらんでいたのであるが――の症状を軽減することによって先天盲に視力を与えることができるのではないかと考え、ある患者にその手術をしたいことを申し出た。その患者はこれに同意するのを渋った。（…）そういう調子ではあったのだが、ともかく手術は行われ、そしてそれは成功した。この若者は、およそ一四歳にしてはじめて光を見たのである。この実験は、ロックとバークリが予見していたことの全てを見事に実証した。長い間、彼は物の大きさも距離も位置関係も、そして形すら見分けられなかったのである。一ブース（約二・六センチメートル）のものが彼の目の前に置かれ、それが（向こうにある）一軒の家を彼の目から隠すと、それは（隠された）家と同じくらい大きいものに彼には見えた。はじめのうちは見るもの全てが、触覚の対象が皮膚に触れるのと同じく、目の上に貼りつき、目に触れているかのように彼には思われたのである」（コンディヤック『人間認識起源論（上）』岩波文庫、二四六～二四七頁）。

（6）Campbell の原著（in：*Thomason's Annals of Philosophy.* Vol X.1817.p.17-29 のドイツ語訳 Über das Sehen）」は、*Archiv für Physiologie.* 1818.Band.IV, Heft I, S.113.

（7）「仕える者は自己を失くしています。自らの自己に他者の自己を充てるのです。その結果、仕える者は主人にお

いて、個別的な自我としての自らを外化され、アウフヘーベンされています。自らの本質的な自己を他者の自己として直観するのです。これに対して主人は、仕える者のうちに、仕える者とは違う他者の自我がアウフヘーベンされているのを、そして彼の個別的な意志が保持されているのを直観します。（ロビンソンとフライタークの物語）」（GW.X-1,S.428）。なお、この論述の背景については、渡辺祐邦「ヘーゲル哲学の隠された源泉（1）――J・H・カンペと彼の『小ロビンソン』」（『北見工業大学研究報告』2号、一九七四年）という先駆的な研究が詳細を極める。またカンペについては、拙論「若きヘーゲルと心理学――『導入教育』もしくは『精神哲学』への旅発ち――」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第一三七輯、二〇一五年）も参看賜りたい。

（8） M.J.Petry：*Hegel's Philosophy of Subjective Spirit.* 2. Anthropology.（D.Reidel Publishing Company）p.472f.

》付記《

本稿は、二〇一九年一一月三日、東北大学大学院文学研究科（F棟）で開催された、「International Philosophical Workshop-Philosophy of Emotion and Community」にて、「Entfernung und Tastinn（Gefühl）Welt und Geist」として口頭発表された論考の改稿である。

（くりはら　たかし・新潟大学名誉教授）